

小説　くぐりぬけて

あこがれの高校に合格した。県下でも有数の進学校だ。少し通学距離は遠いけれど、電車通学って、かっこいいなって思ってた。

そして、何気ない日常を送っていくつもりだった。ところがどうだ、毎日の宿題、小テスト、課題、緊張感のある授業……高校って、こんなにつまらない、うっとおしいものなのか？水泳部は楽しい。水は好きだ。泳ぐことも。楽しいのはそれぐらいだ。



今日も単語テストときた。さんざんだ。前回も合格点に達しなかったということで、「やり直し課題」が出されていた。テストの点数が低いのは自分の勉強不足のせいだ。それぐらいちゃんとわかる。ただ、だからといって、やり直し課題を無理やりやらせるのはどうかだ。何度も書き写すだけで、こんな無意味なことはやってられない。だからすっぼかした。そしたら、クラスメートの前で注意された。こう見え

て、繊細なところもある。水の中で、できるだけ透明に生きていきたいのに、いきなり陸揚げされて跳ね回るぶざまな姿を、まだ名前も憶えていないクラスメートの前でさらしてしまった。ああ嫌だ。学校に行きたくなくなった。

……………

いざ学校が始まってみると、朝早く起きるのもつらい。電車通学へのあこがれは一日で冷めた。むしろ、あの満員電車を想像すると、何とか乗るのを避けたいくなる。かといって、親に学校まで送ってもらうのは、これは変だろう。親にいつまでも甘えているように見えてカッコ悪い。明日は数学の課題の提出日だけど、課題に手をつけていない。単語も憶えていない。「やり直し課題」もしていない。実際、最近朝起きるのが無理になってきた。水泳部が楽しくて遅くまで泳いでいると、やはり体力を消耗するのか、これまでの電車に乗り過ぎすことも多くなってきた。今は、遅刻ギリギリで教室に駆け込んでいる。重い荷物を持って駆け込むのも疲れてしまう。大体、何でこんなに鞆が重いんだ！



重い辞書が三冊も入っている。使いもしないのに、だ。だからといって持って行かないと、そういう日に限って必要だったりする。今の時代スマホで検索だろう。ところが、スマホは電源を切つてロッカーの中に、だと。全くばかげている！

こうして僕は、次の日から学校を休み始めた。休むと休むで親がうるさい。特に母親。耳元で泣き叫ぶ。学校に電話するときにも泣いている。どうにかしてくれ。泣きたいのはこっちの方だ。

とうとう家庭訪問だといって、朝から担任が来た。親が呼び出したらしい。僕は押し入れに駆けこんだ。示し合わせていろいろやらないでくれ。

親は何度か学校にも出かけていった。帰ってくると溜め息ばかり。このままのペースで休むと、夏休み前には、たちまち欠課時数が危うくなってくるらしい。どうしてなんだ。ちよつと休み始めると、この学校にはお前のようなやつはいらない、出て行けということなのか。

部活動の顧問から連絡が入る。泳ぎにだけ来ないか誘われた。それには心が動く。休日の活動日、泳ぎに行ってみた。部員たちは温かく迎えてくれた。泳ぐと気持ちよかった。次の大会にも出ようと誘われた。

部活動に行ったことで、親は大喜びだったけど、だからと

いって、学校に行けるわけではない。行こうとしても、前日のもやもや感が半端なさすぎる。だから相変わらず僕は学校を休み続けた。

.....

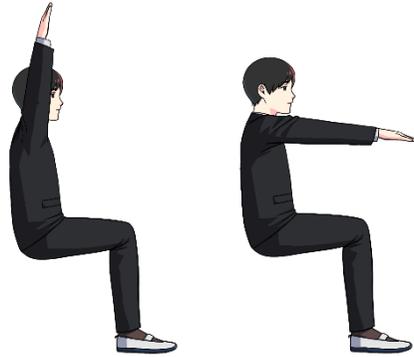
そんなある日のこと、もうそろそろやばいなと思い始めていたころだった。母が僕に「なみのね」相談室の話をした。



そこは湖のほとりにある小さな喫茶室で、カウンセリングルームも兼ねているという場所だった。この際、母の誘いに乗って、一度行ってみたいかと思つてやってきた。先生は優しそうな女の人で、僕に「カウンセリングの技法の一つに臨床動作法というものがあるんだけど、やってみない？」と言った。「自分の

今に集中するの。からだを動かして、どんな感じがするか、自分で感じるの」何を言っているのかよくわからないが、「どうして学校に行きたくないのか」「いつからそうなったのか」「何が原因なのか」などと聞かれるのはうんざりしていたから、からだを動かすだけならやってみようという気になった。学校を休むとからだがなまってしまうのは気になつていたところだし。

先生は、僕にからだの不具合を感じている箇所はないか聞いてきた。取り立てて何もない。「そうなんだ。じゃあ、腕上げ動作課題をやるうか」それは簡単な腕を上げる動作だということらしい。先生は、右手をまっすぐに上まで上げて降ろしてみせた。ちょっと拍子抜けだ。こんなことをして、何が変わるんだ？でも面白いしつきあってみることにした。最初に自分で上げてみた。どうってことない。

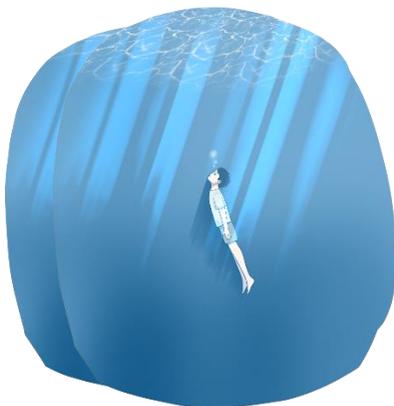


「今のスピードの、半分ぐらいのスピードで上げてみて。そして、こちらでストップをかけたら止まってね」

僕は、ゆっくりゆっくり腕を上げ始めた。ゆっくりって難しい。少し目を閉じてみる。真っすぐに上げているつもりだけど、真っすぐだろうか。何だか揺れている気をするし、ガクガクしている気もする。「はい、そこでストップね」「ここで少し援助します」先生の手が僕の腕の肘を支える。そして、もう片方の手が僕の方に置かれ、「この力を抜いてみようか」と言われる。ああ、こんなに肩に力が入ってたんだ。僕はその力を抜く。「今度は、肘を支えているから、腕の力

を全部抜いてみようか」全部抜く？そんなことできるのか？僕は力を抜こうとする。うまく抜けない。だいたい、抜くって、どういうことだ？「動かしてみるから、自分の力はいれないでね」先生はゆっくりと腕を外側に広げたり内側に曲げたり、下げたり上げたり、ほんとうにゆっくりと僕の腕を動かしていく。そのゆっくりした動きに任せていると、僕は深いプールの中に飛び込んでいくような気がしてきた。水の中に飛び込む。大好きなプール。飛び込むときの、魚になったような感覚が好きだ。

泡がぶくぶくと上がっていく。口からわざと泡を出してみた。みるみる。どんだん僕は沈んでいく。余分なことは何も考えず、ひたすら、自分の重みとスピードに任せて降りてゆく。僕の背中とお腹からはひれが生え、滑らかに水を切る。僕が魚にな



っていることは、誰も知らない。いや、もしかしたら水泳部の顧問は知っているかもしれない。こないだ授業中に人間の祖先は魚だったって言った。ああ、あの授業だけでも出てみ

よいか。やがてプールの底を蹴って、僕は浮上し始める。水に任せるって、こんなにも楽で、こんなにも滑らかなんだ。もう僕は何も考えていなかった。ただただ、ありのままの僕が、自然に任せて浮上していった。

水面に浮かぶ。それはこんなに気持ちいいことだったのか。お母さん、ごめん。泣かせるつもりはなかった。今度手術だって？知らなかったんだ。お父さん、こないだ僕に、勉強なんてどうでもいい、短い高校生活なんだから楽しめって言ってくれた。聞いてないふりをしたけど、嬉しかった。



どれだけの時間が過ぎたろうか。「はい、じゃあここで、自分の力でこの高さをキープしてね。手を放しまーす」先生が何か言っている。僕は徐々に自分の腕を感じ始める。これが僕の腕か。これが僕

の重さか。これが、今ここに生きているということか。「では、またゆっくり降りていきましょう。ゆっくり、自分のペースで

いいよ」僕は腕になりきっている。腕は膨張して、ゆったりと進む。何も余分なことは考えなくていい。ただこの腕が、腕の僕が、空間を切り拓いてゆったりと進む。それはさすがしく、のどかだ。

.....

彼は翌日、父親の車に乗って登校した。余分なことを考えないためにも、昨日のうちにそれを一緒に決めた。彼はどうやら、踏み出す前に考えるタイプみたいだから、ついでに次に合うまでの一週間の予定も決めた。予定さえはつきりすると踏み出すことができる。

そしてその後も、時たま休むことはあるが、それは「計画的欠席」だそう。こうして彼は登校するようになった。母親の手術も無事成功したと、母親からは喜びの連絡が入った。

